

海外就労と女性のライフコース

—— フィリピン農村部の若年シングル女性と世帯内関係を手がかりに ——

小ヶ谷千穂

This paper discusses the implications of overseas migration as domestic workers, for the life course of Filipino women migrants, especially those who are single and without children. Focusing on the transformation of intra-household gender relations, this paper analyzes the intersection of two respective time flow, the continuity of overseas employment and the women's life course including marriage and childbirth.

The women discussed in this paper started their overseas work as singles, then proceeded to marriage and childbirth in the Philippines; at the same time they continued their work abroad. For these women migrants and their household members, the negative concept of “absent mother,” which is often used in the context of social problem to describe the women who migrate overseas, is seldom recalled. These women's accumulated experience of transnational migration are recognized as a certain “career” within their newly formed households through marriage, thus the continuity of overseas employment is not interrupted by life events such as marriage and childbirth. It suggests that the emergence of the women's transnational life course that balances the local gender norm and overseas work, as well as the possibility of a transnational “career” established within the new life course, gradually transforms the local gender norm itself.

キーワード：海外就労、ジェンダー、ライフコース、世帯内関係、フィリピン

1. 国際労働移動における「ジェンダーと社会的移動」——世帯内関係とライフコース

本稿は、家事労働者 (domestic worker) としての海外就労が、特に開始時に若年シングル (子どもなし) であるフィリピン女性のライフコースにとって、どのような含意を持つのかを検討する。

ここでの理論的関心は、国際労働移動のプロセスにおいて女性労働者が送り出し社会と受け入れ社会のはざままでどのような「社会的移動 social mobility」を経験するのかを、概念化する可能性を探ることにある。

そもそも、ジェンダー視角からの移民/移動研究においては、「移動を通して女性の社会的位置 (social position) は変化するのか否か」という問いが、長い間問われ続けてきた (Tienda and Booth 1991 ; 伊藤 1998 ; Hondagneu-Sotelo 1994)。しかしそれは、主流の移民/移動研究が最近までそうであった

ように、ホスト社会における「定住」を前提とした中での議論であったと言えるだろう¹。

翻って本稿が取り上げるアジアにおける女性の単身国際労働移動は、ここ数年で非常に多くの研究蓄積を見ている。主に家事労働者としてホスト国においてきわめて制限された条件下に置かれる女性たちの、ホスト社会における役割や位置を政策や社会構造において解明する研究から、雇用主との日々の交渉実践や出身家族やコミュニティとの関係構築のあり様を記述する人類学的研究まで、この分野での研究蓄積は急速に厚みを増している (Asian and Pacific Development Centre 1989; Battistella and Paganoni 1996; Constable 1997; Parreñas 2001)。

こうした蓄積を踏まえた上で本稿では、家族を帯同しないトランスナショナルな女性の単身移動が、出身社会とホスト社会の間を地理的に移動するそのプロセスにおいて、移動する女性たちにどのような新しい社会的位置を付与するのかを、出身社会側から照射することで明らかにしてみたい。

そもそも、従来の社会移動研究におけるジェンダー差は長らく不問に付されており、ジェンダーの視点からまず女性の社会移動をどのように分析するかは、今日の社会移動研究のパースペクティブそのものを刷新するひとつの重要な局面として国内外で広く議論が展開されている (Payne and Abbott 1990; 原・盛山 1999; 太郎丸 2002; 橋本 2003)。「女性の位置をどのように測るか」という社会階層論・社会移動論の関心は、上記の国際労働移動研究における女性移住者をめぐる問いと、強い親和性を持つ。

たとえばロサンゼルスとローマで働くフィリピン女性家事労働者についての分析を行った Rhacel Parreñas (2001) は、彼女たちが、国際労働移動を通して経済的な地位の上昇と職業的地位の下降とから同時に生じる「矛盾した階級移動 contradictory class mobility」を経験する、と論じている。そこで問題とされるのは、「家事労働者」という出身社会では従事しない職業への「下降」移動が国境を越えた国際移動を契機に生じる、という局面である。

しかし女性の位置の変化を、職業面での変化だけで把握しようとするには限界がある。むしろ、社会移動研究におけるジェンダー視角からの批判は、「職業」という基準のみでの女性の社会的位置の把握を乗り越えようとする試みであった (Dale 1990)。

ジェンダー視角を導入することで「階層化やモビリティについての定義を拡張する」ことを目指す Angela Dale は、そのための切り口として、(1)個人を世帯内部の文脈に位置づけること、そしてそれを(2)ライフコースの観察を通して行うこと、を提示している (Ibid., pp.139-140)。

移住労働研究においても Sylvia Chant (1992) らが、「世帯戦略」アプローチを刷新する「世帯内関係 intra-household relations」への注目を喚起している。このアプローチは、移動する女性の位置を、送り出し世帯の内部関係や、それを支えるローカルなジェンダー規範との関係からとらえようとするものである。Amartya Sen (1990) の「協力的競合 cooperative conflict」関係としての世帯、という概念と親和性を持つこのアプローチでは、ジェンダーと世代、婚姻上の地位などに基づく多様な権力関係が交錯する世帯内関係が、どのように女性の移動の意思決定に影響するのか、さらには女性の移動が世帯内部でどのように評価されるのか、といった点が分析の俎上にのる。

これらの議論に依拠しながら、本稿では女性の国際労働移動——送り出し社会側から見た場合、より正確には海外就労——を、ライフコースに沿って世帯内部の関係性から分析する、という手法をとることとする。その際、以下の二つの「時間」の交差が関心の中心となる。一つは、海外就労の反復・継続、いま一つはライフコースそのものの推移である。

上述したように、アジアにおける女性の国際移動は、家族を帯同しないその「単身」性に、一つの特

徴を持っている。そこには、香港やシンガポールに代表される、政策的にホスト社会への定着を阻止し、必要な労働力ではあるが常に「一時的な労働者」であり社会的な「外部」として滞留させる、という受け入れ社会側の論理がある。しかし、多くの実証研究が明らかにしているように、現在アジアにおける女性の単身移動は、短期契約の繰り返しという形を取りながら、事実上「長期化」する傾向にあると言える。もちろん、何年を越えるとそれを「長期」と呼ぶのか、といった明確な基準を設定することは難しい。しかしながら、少なくとも契約を複数回更新し、さらには行き先国を変えながら、一人の女性が国境を越えて移動「し続ける」という状態は、珍しいものではなくなりつつある。しかし、こうした「単身での一時的滞在」の「長期化」についてジェンダーの観点から扱った議論は、筆者の知る限り多くはない²。

アジアにおける女性の国際移動における「時間」的側面への関心がこれまで相対的に低かった理由の一つとしては、主として家事労働者として移動する女性たちの、ホスト国における職業移動が実質的に不可能に近いことが挙げられるだろう。「住み込み」型の労働形態と雇用契約に基づく滞在資格が、たとえ時間が経過しても彼女たちのホスト国における地位を変化させない制約となっている（小ヶ谷 2001 b）。「矛盾した階級移動」が解消されることはないという理解が、結果として「時間」への関心を遠ざけたのかもしれない。しかし、フィリピンのようにすでに海外雇用が政策的に展開され始めてから30年近い時間を経ている送り出し国において海外労働者の社会的位置を検討しようとする時、時間的変化は大きな関心の対象となりうる³。

ライフコースの推移を扱う根拠については、上述の「世帯内関係アプローチ」を用いた筆者のこれまでの研究との関連で、ここで簡単に述べておくことにしたい。筆者は、女性の国際労働移動における移動者の「婚姻上の地位」の違いが、移動経験を差異化させる大きな要素の一つであるのではないかと考えてきた（小ヶ谷 2001 a、Ogaya 2003）。特に海外就労開始時に「既婚」である、いわゆる「母」たちのそれは、相対的に女性の地位が高いとされるフィリピンにおいても根強く存在する、母親に対する二重規範——経済的貢献をする妻と、家庭にあるべき母——に亀裂を生じさせるものとして、社会的にも「問題視」されやすい。また、ローカルなレベルにあっても、実際の経済的貢献度を比較すると海外就労時の妻のほうが夫よりも収入レベルが高くと、*「世帯のブレッドウィナーは夫であり、自分はサイドライン（＝副収入）の稼ぎ手」*、と自己評価する既婚女性の姿が、調査を通じて観察されてきた。

他方で、シングルで子どもを持たない「娘たち」の場合は、父親役割とされるブレッドウィナー役割を「肩代わりしている」との認知が、本人また世帯内構成員によって抵抗なく行われており、彼女たちは世帯内において相対的にフレキシブルな位置を保持していた。また、フィリピンの若年シングル女性の海外就労においてしばしば支配的とされる、伝統的な*「utang na loob（＝心の中の負債。恩返し気持）」*概念に基づく世帯への経済貢献義務意識が、実際には「違う世界を見てみたい」「海外経験をしたい」といった個人的な動機付けと並存し、親孝行規範がしばしばこうした動機の正当化として動員されていた⁴。

こうした海外就労開始時の婚姻上の地位の違いが分岐点となるのであれば、ライフコースを通じて海外就労を反復・継続する者、具体的には開始時にシングルであり、その後結婚—そして多くは出産—を経て「既婚」「母」となった後にも海外就労を続ける女性たちにとっては、海外就労経験のとりわけ世帯内部での意味づけは、どのような諸相を見せるのであろうか。彼女たちもまた、「母」となった際には、既存のジェンダー規範によって規定された評価を海外就労に付されることになるのか、あるいは彼女た

ちの経験が「妻」「母」役割規定を組み替えることになるのか——。こうした問題関心が、本稿が海外就労の継続性とライフコースの推移という二つの「時間」の交差に着目する基盤となっている。

少々前置きが長くなったが、上記のような問題関心に基づき、本稿ではシングル時から結婚・出産後まで海外就労を継続している女性たちに着目し⁵、彼女たちのライフコースの推移と海外出稼ぎの継続・反復との関係について、代表的な送り出し国であるフィリピンの農村部における調査事例を中心に検討することにしたい。その際に準備される問いは以下である。

- (1) 女性のライフコースと海外就労は、どのような相互関係にあるのか。
- (2) 結婚・出産といったイベントは、女性たちおよびその世帯にとっての「海外就労」の意味をどのように変化させるのか／させないのか
- (3) 海外就労の継続においてローカルなジェンダー規範はどのように関与するのか。

ここで議論の材料として用いる事例は、筆者が1998年3月以来続けている、フィリピン農村部バラングアイAでのフィールドワークに基づいている⁶。バラングアイAは中部ルソン地方（第三地域 Region III）ヌエバ・エシハ州に位置しており、Region IIIは、海外出稼ぎ者の送地域としては全国で第三位の地域である。

2. 「親孝行な娘」の「結婚」選択：世帯貢献とライフ・イベントの遂行

まず、若年シングル女性たちが海外就労のさなかにあって結婚を決定した事例、およびその後出産にいたった事例を紹介し、彼女たちの世帯貢献とライフ・イベントの遂行との具体的な関係性について考察してみたい。

〈世帯貢献を凌ぐ、新しいプライオリティ：ヴァンジーの場合〉

ヴァンジー（36歳⁷。大学2年まで修了⁸）は、1993年からクウェートで家事労働者として働いてきた。海外就労を始めた当初は、地元の町役場に勤めている姉と共に世帯におけるブレッドウィナー役割を担っていた。

ヴァンジーは9人兄弟姉妹の末っ子で、地元の国立大学を2年で中退した後、隣の市の衣料品店、近隣のパンパンガ州のベーカリー、そしてバラングアイAのある町のベーカリーで働き、その後遠縁にあたる、海外就労経験のある女性の叔父にリクルートされてクウェートへ働きに出た。クウェートでは1年目は家事労働者として働いていたが、その後雇用主の下を逃げ出して現在は4人のフィリピン女性と同居し、衣料品店の店員をしている。

ヴァンジーの世帯は、父親と母親、それにすぐ上の姉夫婦とその子供2人で、ヴァンジー自身を含めて7人、3世代からなる大家族である。父親は、以前は9haの借地農であったが、結婚した子供たちに土地を分配したために現在は2.5haの米作農業を営んでいる。母親に副業はなく家事全般と孫の世話を担当している。地元役場に勤める姉はカレッジ卒で、その夫は1haの借地農である。

ヴァンジーの海外就労の決定に対しては、「フィリピンでは仕事がなく、サラリーもよくない」ので父母はともに賛成した。ヴァンジーの父親は、1998年3月の筆者との最初のインタビュー時に、ヴァンジーからの送金がなければ「死んでしまう」、と冗談めかして話していたが、実際彼女からの送金は、食料、日常的な支出、さらには農業費用などに使われ、97年には家も新築された。

しかし、海外就労を始めて5年後の1998年末に、ヴァンジーは突如ブレッドウィナー役割を降り、代わって、「自分の結婚」のために貯蓄を始めた。そして出稼ぎ開始から9年後の2002年に、彼女はフィリピンにおいて、長く付き合っていたボーイフレンド（彼もまた、サウジアラビアで長期にわたって海外就労をしている）と結婚した。そして結婚式後すぐに、カップルはそれぞれの就労先に再び戻り、フィリピンに永住帰国する予定はしばらくはないという。

ブレッドウィナー役割を担い、その後、その役割を自ら降りたヴァンジーの事例は、少なくとも我々に、シングル女性の海外就労における世帯貢献ないし世帯戦略遂行という要素が、支配的というよりもむしろ比較的流動的なものであることを教えてくれる。もちろん、彼女の場合、世帯内に農業収入や姉や義兄など他の収入源が複数存在していることが、こうした行動を可能にしていることも事実であろう。しかし、そうした条件があるものの、5年間続けてきた送金を止めるということの、世帯にとっての経済的影響は少なくないはずである。それでも世帯への経済的貢献を止めたことを非難されず、彼女の「結婚資金づくり」を親に許容させられるのは、「親孝行な娘」規範に沿った98年までのヴァンジーの「実績」が、結果として彼女の世帯内位置を上昇させた、とも言えるのではないだろうか。

ヴァンジーの事例が示すように、「親孝行な娘」役割を巧みに演じる女性たちは、結婚や出産という自分たちの人生における「重要」イベント——それはきわめてジェンダー化されたものであるのだが——の遂行もまた、忘れることはない⁹。次に、「結婚」「出産」が主要な帰国動機となった事例を見てみたい。

〈結婚するため〉の帰国：フィロメーナの場合

現在は結婚して1児を持つフィロメーナ（40歳）は、1994年から1997年までの独身時代、アラブ首長国連邦（UAE）でベビーシッターとして働いていた。フィロメーナは7人兄弟姉妹の上から2番目で、父親は1haの借地農であったが、現在は病気のため弟の1人が代わって農業経営を行なっている。7人兄弟姉妹のうち4人は既婚である。

出稼ぎ当時のフィロメーナの世帯は93年から病気で農業ができなくなった父親と母親、そして同じ州内の別の町のベーカリーに勤務し月に一度帰宅するすぐ下の妹と、当時ハイスクールの学生であった一番下の妹、そして父に代わって農業をやっている弟の6人からなっており、現在の構成とほとんど変わっていない。

フィロメーナは小学校卒業後、「自立したかったので自分で決めて」、単身でマニラのハイスクールに進学し、卒業後は87年から93年までの6年間マニラで工場労働者として働いていた。6ヶ月ごとの契約で、通算4つの工場働き、最初25ペソであった日給は最終的には120ペソにまで上昇したという。93年12月に、10年間UAEで働いていた友人に仲介業者を紹介され、94年3月にビザを取得、4月に渡航した。

フィロメーナの海外就労の決断は「お金と経験の両方のため」の自己決定で、母親は「冒険すれば経験が得られる」として特に反対しなかった。

彼女の送金は、末妹の学費と、「フィロメーナからの送金を目に見えるようにするため」との母親の決断による家の改築費用などに充てられていた。

しかし1997年6月に、フィロメーナは労働契約を途中で打ち切り、フィリピンに帰国する。その理由

は、やはり同じフィリピン人海外労働者としてサウジアラビアで働いていた文通相手と結婚するためであった。彼女が学費の面倒を見ていた妹はまだ学業を終えていなかったが、フィロメーナは、「結婚する」という自身の人生設計を優先させた。

フィロメーナは結婚後すぐに第一子を妊娠・出産し、その後2000年にはバーレーン、そして2003年には台湾へと海外就労を再開していくことになる¹⁰。

〈海外就労と「家族計画」：マリヴィーの場合〉

37歳のマリヴィーは、1986年に20歳で海外就労を開始した。当時彼女はまだ独身であり、妹がすでにマレーシアで家事労働者として働いていた。この妹がマリヴィーと一緒にマレーシアで働くように誘った。マリヴィー自身は「自分で働いて自分のお金を作り、それを両親と分け合いたい」と考え、大学での勉強を中断してマレーシアで家事労働者として5年間働いた。農業を営んでいた彼女の両親は娘の決定に同意し、マリヴィーは、不定期ではあったが両親への送金を行っていた。

しかしマリヴィーは、「結婚して自分自身の家族を持ちたくなった」、として1991年にフィリピンに帰国する。そしてかねてからのボーイフレンドであった現在の夫と結婚し、1992年には彼との間に第一子をもうけた。

その後1994年、28歳になったマリヴィーは、同じく家事労働者として働くために今度は香港へ渡った。そこで4年間働いた後、1998年1月、マリヴィーは再びフィリピンに帰国した。今回の帰国理由は、「次の子どもが欲しくなった」、ことであった。事実、マリヴィーは帰国後すぐに第二子となる娘を妊娠・出産した後、2001年に再び香港に戻っていった。

ここでの彼女たちにとっての結婚の意味付けがきわめて多義的であることは、指摘しておかなければならない。バランガイAにおいては、特に20代後半から30代のシングル女性に対する、結婚への強い社会的プレッシャーが存在する。これは、Mina Roces (1998) が指摘するように、フィリピンにおいて広く見られる、結婚して子どもを持つことが「真の、尊敬すべき女性」とであるとみなす文化的規範に支えられている(Roces 1998)。こうした文脈を考慮するならば、上記3人の女性の事例はいずれも、こうした「適齢期での結婚」に対する社会的プレッシャーへの対応とも読める。しかし他方で、彼女たちの結婚は、少なくとも親や他の家族員からの強制ではなく、それぞれが個人的に培ってきたパートナーとの比較的長期にわたるコミットメントの帰結として現れている。これは、「適正な年齢で結婚する」ことによって、フィリピンにおけるジェンダー規範から逸脱しないことを主体的に選び取る彼女たちの志向を反映しているとも言える。現実には、彼女たちは結婚を、海外就労における経済的世帯貢献に優先させているのである。

3. 海外就労の反復・継続とジェンダー規範へのインパクト：二つの「時間」が交差する時

しかし、結婚によって彼女たちが属する「世帯」の編成は当然変化していく。上記の女性たちの事例が示すように、彼女たちにとっての世帯内関係は、結婚後、特に夫と子どもとの関係において重層化する。その中で、結婚・出産というライフ・イベントを遂行し終えた彼女たちが再び海外就労に戻っていく時、変化した世帯内関係における彼女たちの海外就労はどのように位置づけられるのであろうか。ま

た、そこには海外就労開始時既婚者との違いは見られるのであろうか。

マリヴィーが結婚後2年で再び海外行きを決めた理由は、「夫の収入は十分だが、万が一の備えのために」「今度は夫を助けたい」、というものだった。マリヴィーが香港行きを決めた際、夫はさびしがり、またマリヴィーが「ラヴ・シック」になってしまう、と主張して彼女の決定に反対したが、最終的には本人に押し切られる形となった¹¹。マリヴィーによると、1994年から1998年までの間の香港滞在中彼女は月額11,000ペソ¹²の収入を得ており、その約90%を夫に対して毎月送金していた。送金の使途は夫婦で共同で決定していた。マリヴィーは、1998年3月の最初の筆者とのインタビューでは、この間の彼女の送金は家計の臨時支出に使われていた、と説明していた。しかし2001年10月のインタビューにおいて、最初の香港滞在時は自分自身が世帯のブレッドウィナーであった、と認めている。

実際、彼女の送金は現在夫の管理の下で世帯の主要な収入源となっている牛2頭と、やはり夫が運転するトライシクル¹³の購入費に充てられた。また、新しいテレビ、ステレオ、冷蔵庫などの電化製品購入や家の改築などが、マリヴィーの送金によって行われた。

フィロメーナの場合、2003年現在フィリピンで彼女の母親が育てているフィロメーナの幼い息子の生活費を送金しているのは、サウジアラビアで働く彼女の夫である。フィロメーナは、バーレーンおよび台湾での収入を現地で貯蓄しており、送金はしていない。しかし、「送金しない」ことをフィロメーナが家族から責められる、ということはない。

そこには、海外就労開始時にすでに「母」であり、就労期間も比較的短いバランガイAの既婚女性たちが直面し、かつ自ら内面化しなければならなかった伝統的なジェンダー役割規範——男性が「ブレッドウィナー」で女性は「サイドラインの稼ぎ手」——はもはや、見られない。シングル時から既婚時にかけて海外就労を継続している女性たちの世帯内での地位は、「ブレッドウィナー」か「サイドラインの稼ぎ手」かといったいわば伝統的なジェンダー役割規範を基準にした評価からは、すでに独立しているのである。

こうした結婚後の彼女たちの新たな世帯編成における海外就労の意味づけは、以下に述べるような彼女たちの海外就労経験の蓄積と密接に結びついていると考えられる。

出産後に海外就労を再開した際にマリヴィーは、自らマニラの斡旋業者に応募のために出かけていき、「自分自身でそのエージェンシー(=業者)の存在を確かめ、きちんと政府に認可されているところかどうか」を確認している。こうした慎重さは、シングル時のマレーシアでの就労・滞在経験に基づいている。また、マリヴィーが第二の就労先として香港を選んだ理由は、やはりその時香港で家事労働者をしていた妹から、「香港ではマレーシアよりも収入が2倍になる」との情報を得ていたからである。実際、マレーシアでの就労経験が評価され、マリヴィーは香港での雇用主を15日間で見つけられている。これは、同時期に香港に応募した同じバランガイAの女性が、実際に雇用主を見つけるまでに約2年の時間を要したことと比べると、きわめて迅速であったことがわかる。

同様にフィロメーナも、バーレーン、さらに台湾へと就労先を変えていった理由として、それぞれの移動先で収入増加が見込めることを挙げている¹⁴。

このように、結婚の前後での海外就労の継続において、彼女たちは自分たちの経験や直接的なネットワークを通じて、次の行き先をどこにするか、またどれくらい収入を増やすことができるのか、といった情報を収集し、計算した上で移動を決定している。これは、同じバランガイAにあって「既婚」の状態ですべて初めて海外就労に参入する、「母」たちの多くが、中間媒介者であるリクルーターの間接的情報に全

面的に依存している点と大きく対比をなしている。

こうして蓄積された海外就労経験は——マリヴィーの場合のように、他国での就労経験が次の就労先選択に有利に働くというメリットも伴いながら——「家事労働者として働くこと」を、本人にもそして新たに編成された世帯構成員にとっても、もはや Parreñas が指摘した職業的な「下降移動」とは意味づけさせない根拠ともなっていく¹⁵。

また彼女たちに対しては、すでに「母」である状態から海外就労に参入する既婚女性たちがしばしばそのジレンマに苦しむことになる、「家庭にあるべき母親」役割は、ほとんど強調されない。経済的貢献と、家庭でのケア役割という「母親」の二重役割に亀裂を生じさせる、とされる「母親の海外出稼ぎ」とは異なる側面が、ここに照らし出されている。

すなわちこの点において、海外就労の経験蓄積と、ライフコースの推移という「二つの時間」の交差が、既存のジェンダー規範を再編させていくようなダイナミズムを生んでいる、と考えられるのである。

換言すれば、シングル時から蓄積されたトランスナショナルな移動経験が、本人および新たに編成された世帯内部、特に夫を中心とする世帯構成員に認知されることを通して彼女たちの「キャリア」となっているのではないかと考えられるのである。ゆえに、上述したような、結婚や出産といったライフ・イベント——実際それが彼女たちの「女性性 womanhood」の完成を求める志向の帰結でもあるのだが——が、海外就労の継続・反復を阻害する要因とはならないのである。

ここでいう「キャリア」とは、冒頭で触れたような、「職業」という基準のみでの女性の社会的位置の把握を乗り越え、Dale (1990) がいうところの世帯内部の文脈をも伴った、総合的な意味での女性の社会的位置を指すものとして用いている。つまり、グローバルな労働市場における「移住家事労働者」としては、職業的地位が低く位置づけられていても、送り出し社会、そして本人においても「海外就労」という形態そのものが、その職種に関わらず「職業」としてカウントされる。そしてそれが単なる「職業」的地位としてだけでなく、世帯内での意味づけを伴った「社会的位置」として確立されるかどうかは、本稿が試みてきたような、「2つの時間の交差」として彼女たちの国際労働移動を把握することによって、あぶりだされるのではないだろうか。逆に言うと、海外就労が「キャリア」となるかどうかは、彼女たちの、特に世帯内部における海外就労の意味づけによって規定される、ということである。

またこの事は女性たちが、結婚・出産というローカルなジェンダー・イベントの達成と、職業そのものは家事労働者として変わらずとも収入を増加させるため、あるいはよりよい労働環境の追求の結果として、渡航先を変えながら海外就労経験を蓄積していくこととのバランスをうまく取っている、とも解釈される。

もちろん、女性たちの世帯への経済的貢献が、どのような文脈にあっても最大の重要事であることは、言うまでもない。しかし、本稿で紹介してきた事例が示唆するのは、フィリピン女性にとって、海外就労がもはや「一時的で異常なこと」ではなく、上述のようなトータルな意味での「キャリア」として海外就労を確立しようような段階に到達している、という現実の位相である。そしてまた、こうした海外就労の「キャリア」化は、彼女たちがライフコースというもう一つの「時間」の中で「既婚」という立場になっていくという意味で、結果として——条件付きではあれ——既婚女性に対するジェンダー規範やそれに基づくジェンダー関係が、再編される可能性をも秘めているのだ。

4. トランスナショナルなライフコースと「キャリア」確立の可能性：今後の課題へ向けて

本稿での議論は、既存の社会移動の観点から見れば、家事労働者として変化することのない、低い職業的地位に甘んじる「下降」移動の持続、とも解釈されるかもしれない。

しかしながら、海外就労経験の蓄積と、ライフコースの進展という「二つの時間」の交差は、彼女たちに、送り出し社会における一定の社会的位置を付与している。海外就労開始時に世帯内において相対的にフレキシブルな位置を保持していたシングル女性たちに、結婚後も既存のジェンダー規範からの相対的な自由度を高めさせるような位置を付与したのが、シングル時の海外就労の経験であった。

本稿は、トランスナショナルな移動のプロセスに参入する女性たちが、ローカルなジェンダー規範とのバランスを保ちつつ、海外就労を折り込んだライフコースを創出していることを明らかにしてきた。しかし同時に、この海外就労とライフコースの遂行によって確立されつつある「キャリア」は、結果として、徐々にローカルなジェンダー規範そのものを変化させていく可能性をはらんでいる。

冒頭での課題であった、トランスナショナルに移動する女性たちの「社会的移動」分析に接近する、という作業の基礎工事としては、少なくともこうしたローカルとトランスナショナルな文脈の接合のされ方を検討し、女性たちがその間でバランスを維持するあり様に着目する必要があることは、確認されたのではないだろうか。

こうしたジェンダー関係の再編が、世代間の海外就労の継承によって実現されつつある場合もある。筆者が別な調査地で行っている聞き取り調査では、父親の病死を機に始まった母親の家事労働者としてのイスラエルでの就労によって娘たちが教育され、その後、娘たちも次々とイスラエルや日本で就労しているケースがある。娘たちはいずれも、母や姉の送金によって学業を終え、フィリピンで結婚し子どもをもうけながら、やはり海外就労を続ける。その際意思決定には、夫がどんなに反対しようとも、母親世代から継承されてきた「海外出稼ぎ文化」が夫―妻の世帯内関係交渉を上回り、夫婦間ジェンダー関係は、「夫＝ブレッドウィナー」というパターンとは、すでに大きく異なっている。そして、夫よりも学歴の高い妻は、自分の海外送金で自分の子どもたちを私立の質の高い学校に通わせるのである。「海外で働くのは当たり前のこと。フィリピンで働くなど、耐えられない」、というこの姉妹は、しかし2人ともフィリピン男性とフィリピンで結婚し、子どもはフィリピンで育てているのである。こうした、世代間での海外就労の継承が、子ども世代のライフコースやそこでのジェンダー規範意識の変化にどのような影響をもたらすかについては、稿を改めて論じることにした。

しかし強調したいのは、こうした海外就労の継続（あるいは継承）とライフコースの推移という「二つの時間」の交差が、自動的に彼女たちに一定の社会的位置を付与したり、ジェンダー規範に変化をもたらす、というほど事態は単純なものではない、ということである。家計の窮地を救うために海外就労を決断したにも関わらず、夫の反対というまさにその世帯内権力関係によって、労働契約を途中で打ち切らざるを得なかった既婚女性が、その短期の海外就労経験を振り返って、「自分の送金は夫を助ける妻のサイドラインであった」と認めることとなることは、示唆的である。短期での女性の単身移動は、伝統的とされるジェンダー規範をむしろ相対的に強く動員し、その枠組みの中で女性たちの移動を「特異なこと」として解釈させる方向に作用していくとも言えるのである。

フィリピン全体で見たとき、女性の海外就労の長期化と同時に、常に新規参入者が存在し続けていることを、忘れてはならないだろう。実際、フィリピンにおける海外労働者の「女性化 feminization」が

7割を超えているとするデータの根拠は、新規雇用者（newly hired）数に基づいているのである。

このことは少なくとも、一定の時間を経てジェンダー規範から一定程度自由になれる段階まで到達できる層と、常にジェンダー規範からの引き戻しが背後に控えている層とが並存していることを意味する。また、どんなにその海外就労が長期化したとしても、とりわけ「母親」の状態から海外就労を開始した人にとっては、それをトータルな意味での「キャリア」として周囲に認識されることが、きわめて難しいことも事実である¹⁶。

また、移住女性にとっての「キャリア」の形成が、その裏返しとして、絶え間なくグローバルな「移住家事労働者」を供給し続けるプールを形成することになることも事実である（Constable 2001: p. 197）。すなわち、国際労働移動を不可避のものとする、ジェンダー化されたグローバルな社会・経済編成が、本稿で検討したような彼女たちのトランスナショナルなライフコースを「要請」しているという事も、見逃すことはできない。

海外労働者の社会移動について、フィリピンにおける関心はそれほど大きくない。また、その評価もさまざまで、新たなミドル・クラスの一つとしてカウントする論者もいれば、労働者の一形態とする指摘もある。しかし、本稿が若干でも示唆したように、ジェンダー視角を持ってのぞむのならば、海外労働者の「社会的位置」は、財産や職業、といった基準のみでは、把握しきれないだろう。海外就労を「キャリア」形成として論じるためには、海外就労開始時の彼女たちを取り巻く機会構造、国内の就労機会と海外の就労機会との選択基準の違い、教育機会の問題といった、より幅広い文脈に位置づけて論じていく必要がある。本稿は、国際労働移動を通じた社会移動を検討する切り口として、特にジェンダー関係を視野に入れる上で効果的と思われる世帯内関係アプローチを取り入れたが、こうしたより広い社会・経済構造と接合させた議論は、筆者の今後の課題としたい。

（おがや・ちほ／日本学術振興会）

掲載決定日：2004（平成16）年12月7日

注

- 1 最近になってアメリカを中心とする移民／移動研究においては、「定住」した移民が出身社会との社会・経済・政治関係を維持し続け独自の社会空間を展開するというトランスナショナリズムの議論が盛んだが、そこでも、移民たちはホスト社会に一定程度の基盤を形成していることが前提条件となっている。このトランスナショナリズムの議論にあっては、Phizacklea (2003) や Pessar and Mahler (2003) らが、トランスナショナリズムの分析への「ジェンダー視角の導入」を提示しており、従来の移民／移動研究におけるジェンダー・パースペクティブの導入よりも時間差が少ない形で、今日のトランスナショナリズムの議論がジェンダー分析を取り入れる可能性が示唆される。
- 2 滞在の長期化に関しては、以下のような興味深い報告もある。Sim & Wee (2004) は、香港で働くフィリピン人家事労働者の事例から、「将来フィリピンに戻りたくない」と回答した女性たちの滞在期間が、「将来はフィリピンに戻りたい」と答えた人よりもかなり長い（それぞれ平均で前者は7年5ヶ月、後者は平均1年9ヶ月。）ことや、これまでの研究から、移住労働者の滞在が7年を越えるとその送金が減ることを、彼女たちが調査した香港のフィリピン人家事労働者の多くが外貨建ての貯蓄をしていることと結びつけて紹介している。上記の調査結果は、本稿とはやや立場を異にしているものの、時間的変化という視点を国際移動研究に持ち込むパースペクティブは共通する。
- 3 関連して、海外就労が職業選択の一つとしてどのようにフィリピン社会の中に位置づけられているのか、そこにジェンダー差がどのように存在するのか、またそれが時間的にどのような変化をみせているのか、といった論点が当然生じうる。本稿では海外就労の意思決定や意味づけに世帯内関係からアプローチするため、上記のような世帯外要因と

世帯内要因との関係については、稿をあらためて論じることにはしたい。

- 4 詳細は、Ogaya (2000)、および小ヶ谷 (2001 a) を参照されたい。
- 5 ここで取り上げる女性たちには、シングル時に子供はいない。しかし、シングルマザーの海外出稼ぎは、フィリピンにおいては正確な数は把握できないものの、海外出稼ぎ女性の中の1つのカテゴリーをなしている。「母親」と「娘」の間に属するシングルマザーたちが海外出稼ぎにおいて経験する多層的な「矛盾」については、Ogaya (2003) で論じている。
- 6 「バランガイ (Barangay)」とはフィリピンにおける最小の行政単位であるが、農村部においては、それが一つの地域的コミュニティをなしている場合が多い。実際、バランガイ A はそれにあたる。
- 7 本稿での女性たちの年齢は、すべて2003年8月現在のものである。
- 8 フィリピンにおいては、日本で言うところの「大学中退」であっても、それが「何年生までを終えたのか」というところで区別をつける傾向がある。また、大学中退は「drop out」よりも、「undergraduate」と言い表されるほうが一般的である。
- 9 他方で Tacoli (1996) は海外就労の継続と引き換えに、結婚の意志はあるものの「非婚」を選ばざるを得ないシングル女性の存在を指摘している。
- 10 フィロメーナの夫は、彼女よりも先にサウジアラビアに戻っている。
- 11 マリヴィーが香港で働いている間、二人の子どもの世話をしているのは、80歳を越える夫の祖母である。
- 12 2004年8月現在で1ペソ=約2円であるが、1994年~1998年の間は、1ペソ=4円~7円であったと推定される。
- 13 トライシクルとは、モーターバイクにサイドカーをつけそこに乗客を乗せる、フィリピンで一般的な乗り物。バランガイ A は町の中心からやや離れているため、トライシクルを所有していることは、一定の収入源の保証を意味する。
- 14 本人は、「バーレーンが UAE より倍稼げ、台湾はさらにその3倍稼げる」と言っている。
- 15 もちろんこの評価には、フィロメーナやマリヴィーの学歴や前職経験を考慮に入れなければならない。実際、彼女たちはそれぞれ、ハイスクール卒、カレッジ中退であり、フィリピン国内であっても、必ずしも学歴が高いわけではない。
- 16 筆者が別稿で分析したことのある、映画『Anak』における主人公ジョシーの置かれた立場は、まさにそれを象徴している。小ヶ谷 (2002)、Ogaya (2004) を参照されたい。

参考文献

- Anthias, Floya. "Metaphors of Home: Gendering New Migrations to Southern Europe." In Floya Anthias and Gavriella Lazardis eds. *Gender and Migration in Southern Europe: Women on the Move*. Oxford: Berg, 2000.
- Asian Migrant Centre, Asian Domestic Workers Union, Forum of Filipino Reintegration and Savings Groups, Indonesian Migrant Workers Union, Thai Women Association. *Baseline Research on Racial and Gender Discrimination Towards Filipino, Indonesian and Thai Domestic Helpers in Hong Kong*. Hong Kong: Asian Migrant Centre, 2001.
- Asian and Pacific Development Centre. *Trade in Domestic Helpers: Causes, Mechanisms and Consequences; Selected Papers from the Planning Meeting on International Migration and Women*, Kuala Lumpur: Asian and Pacific Development Centre 1989.
- Battistella, Graziano and Anthony Paganoni eds. *Asian Women in Migration*. Quezon City: Scarabrini Migration Center, 1996.
- Chant, Sylvia and Sarah A. Radcliffe. "Migration and Development: the Importance of Gender." In Sylvia Chant ed., *Gender and Migration in Developing Countries*. London; Belhaven Press, 1992.
- . and C. McIlwaine. *Women of a Lesser Cost: Female labor, Foreign Exchange and Philippine Development*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 1995.
- Constable, Nicole. *Maid to Order in Hong Kong: Stories of Filipina Workers*. Ithaca: Cornell University Press,

- 1997.
- Dale, Angela. "Stratification over the Life-course: Gender Differences within the Household." In Geoff Payne and Pamela Abbott eds., *The Social Mobility of Women: Beyond Male Mobility Models*. London: The Falmer Press, 1990.
- 原純輔・盛山和夫『社会階層——豊かさの中の不平等』東京大学出版会、1999年。
- 橋本摂子「〈社会的地位〉のポリティクス——階層研究における“gender inequality”の射程」『社会学評論』54(1) (2003) : pp.49-63.
- Heinonen, Tuula. "Negotiating Ideal Womanhood in Rural Philippine Households: Work and Survival." In Parvin Ghorayshi and Clarie Belanger eds. *Women, Work, and Gender Relations in Developing Countries: A Global Perspective*. Westport: Greenwood Press, 1996.
- Hondagneu-Sotelo, Pierrette. *Gendered Transition: Mexican Experiences of Immigration*, Berkeley: University of California Press, 1994.
- 伊藤るり『「ジャパゆきさん」現象再考——80年代日本へのアジア女性流入』梶田孝道・伊豫谷登士翁編著『外国人労働者論—現状から理論へ』弘文堂、1992年。
- .「国際移動とジェンダーの再編——フランスのマグレブ出身移民とその家族をめぐる」『思想』第886号 (1998) : pp.60-88.
- Ogaya, Chiho. "Gendered Migration and Supplementary Income: Mobilization of Gender Concepts in Rural Philippines." *Journal of Asian Women Studies*. Vol.9. (2000): pp.30-43.
- 小ヶ谷千穂『「移住労働者の女性化」のもう一つの現実——フィリピン農村部送り出し世帯の事例から』伊豫谷登士翁編著『経済のグローバリゼーションとジェンダー』明石書店、2001年a。
- .「国際労働移動とジェンダー——アジアにおける移住家事労働者の組織活動をめぐって」梶田孝道編『国際化とアイデンティティ』ミネルヴァ書房、2001年b。
- .「女性移民（移住女性）」伊豫谷登士翁編『グローバリゼーション』作品社、2002年。
- Ogaya, Chiho. "What is 'Social Mobility' for Migrant Women?: A Study on the Transnational Social Mobility of Female Overseas Filipino Workers." A paper presented at *International Conference on Women And Migration In Asia*. Developing Countries Research Center, University of Delhi, India. December 10-13, 2003.
- . "Social Discourse towards Filipina Women Migrants", August 2004, *Feminist Review*, Issue 77 (2004): pp. 180-182
- Parreñas, Rhacel Salazar. *Servants of Globalization: Women, Migration and Domestic Work*. Stanford: Stanford University Press, 2001.
- Pessar, Patricia R. and Sarah J. Mahler. "Transnational Migration: Bringing Gender In." *International Migration Review*. Vol.37. No.3. (2003): pp.812-846.
- Phizacklea, Annie. "Transnationalism, Gender and Global Workers." In Mirjana Morocvasic-Muller, Umut Erel and Kyoko Shinozaki eds. *Crossing Borders and Shifting Boundaries: Vol.1. Gender on the Move*. (International Women's University 2000). Leske+Budrich, Opladen, 2003.
- Payne, Geoff and Pamela Abbott eds. *The Social Mobility of Women: Beyond Male Mobility Models*. London: The Falmer Press, 1990.
- Roces, Mina. "Kapit sa Patalim: Victim and Agency in the Oral Narratives of Filipino Women Married to Australian Men in Central Queensland." *Lila: Asia-Pacific Women's Studies Journal*. 7 (1998): pp.1-19.
- 篠崎香子『「矛盾した階級移動」をめぐる3つの交渉の類型——在独フィリピン人移動家事労働者の事例から——』『ジェンダー研究年報』第7号（通巻24号）(2003) : pp.31-52.
- Sen, Amartya K. "Gender and Cooperative Conflicts." In I. Tinker ed., *Persistent Inequalities, Women and World Development*. New York: Oxford University Press, 1990.
- Sim, Amy and Vivienne Wee. "Labour Migration by Filipina Domestic Workers to Hong Kong: Conditions, Processes and Implications." A paper presented at *International Workshop on "Contemporary Perspectives on*

- Asian Transnational Domestic Workers.*” Asian Meta Centre for Population and Sustainable Development Analysis. February 23-25, 2004.
- Tacoli, Cecilia. “Migrating ‘for the Sake of the family?’; Gender, Life Course and Intra-Household Relations Among Filipino Migrants in Rome.” *Philippine Sociological Review* Vol.44, No.1-4. (1996): pp.12-32.
- 太郎丸博「社会階層論とマイクロ・マクロ・リンク——John H. Goldthorpe の社会移動論と合理的選択論」『社会学評論』Vol.52、No. 4. (2002) : pp.504-521.
- Tienda, Marta and Karen Booth. “Gender, Migration and Social Change.” *International Sociology*, Vol.6, No.1. (1991): pp.51-72.
- Trager, Lilian. “Family Strategies and the Migration of Women: Migrants to Dagupan City, Philippines.” *International Migration Review*. vol.18, no.4, (1984): pp.1264-1277.
- Wolf, Diane Loraine. *Factory Daughter: Gender, Household Dynamics, and Rural Industrialization in Java*. Berkely: University of California Press, 1992.